

～二度と忘れはしない～

# 那須岳山行

## 2005.4.16

### メンバー

### 会計

用途	金額
小岩→(電車)→黒磯【往復】	¥5,880
黒磯駅→(バス)→那須湯本【フリーパス】	¥2,500
食料、行動食など	¥1,630
ニューおおたか宿泊代(温泉、2食付)	¥7,000
おみやげ	¥650
合計	¥17,660

### 食料

4/16B: おにぎり3個+紅茶(電車内にて)

4/16L: 行動食(パン1個、チップスター、コパン、チョコ等)

⇒思ったよりも、今回は食べていない!? 寒いと食べるのが面倒になってしまうのか!?

## 行程表

4/16(土)

黒磯駅 →(バス)→ ロープウェー駅(1380m) → 峠の茶屋 → 峰の茶屋避難小屋(1720m)  
8:45                      9:40/10:00                      10:15/10:15                      11:00/11:15

→ 朝日岳(1896m) → 清水平 → 三本槍分岐 → 分岐 → 迷う(沢) → 分岐  
12:00/12:15                      13:20/13:30                      14:00                      16:00

→ 迷う… → 分岐 → 救助隊と合流し下山 → 北温泉  
18:30                      21:00                      21:30

【歩行時間: ?? 時間 ?? 分】

## 記録

- 8:25 黒磯駅着。駅にはミニコンビニあり。「東野交通」案内所にて、フリーパスを買う。
- 8:45 1番乗り場より、ロープウェー駅行きのバスに乗る。
- 9:40 ロープウェー駅。ここで雨が降り出す…。3年半ぶりにレインウェアとザックカバーを装着。
- 10:00 ロープウェー駅出発。登山道の入口がわからず、車道を歩く。
- 10:15 峠の茶屋。登山道に入る。アイゼンをつけて、再出発。  
これよりしばらく雪道が続くが、足跡を追って歩く。しばらく歩き、「峰の小屋まであと0.8km」の看板回りからは、雪のないガレ場の道が続く。今日は風が弱かった。
- 11:00 峰の茶屋避難小屋着。休憩。登山客が数名いた。
- 11:15 峰の茶屋避難小屋出発。ここから10分くらい雪道が続くが、以後は雪のない岩場。那須の4月は雪が解けた所とそうでない所との差が激しいようだ。岩場には黄色のペンキで目印がつけられている。時折くさり場もあり、危険箇所も多い。
- 11:45 朝日の肩(通過)。これより山頂を目指すが、一度山頂への道を間違えてしまう…。
- 12:00 朝日岳。本日の唯一の山頂。しかしガス。何も見えない。一人で写真撮影に励む。
- 12:15 朝日岳出発。朝日の肩まで下りは5分。その後しばらくすると、また雪道となる。  
登山道に積もった雪道は、底抜けのものが多く、何度も足をとられる。また雪道と雪のない道が続くので、アイゼンの着けはずしに時間をとられてしまう。  
清水平付近は、一部、木道が続く。晴れていれば気分がよさそうであるが…。
- 13:20 三本槍分岐着。この辺りは、相変わらず雪道で歩きにくい。
- 13:30 出発。  
しばらく歩きハイマツ帯を抜けると、そこはスキー場のゲレンデのよう。足跡がまったくなくなり、どちらへ進めばよいか躊躇する。しかし今さらもと来た道を引き返すこともできない

し、地図を開き、尾根沿い(中の倉の尾根)に下るしかないと判断する。登山道の雪道に比べ、スキー場のような下りはスイスイ滑り、今まで時間をロスしていた分を取り戻せた。下っている最中はやや不安になりながらも、要所要所に見られる赤いテープを見つけては安心する。またこの辺りは標識が雪に埋もれていたりもするから、積雪は1m以上あるのだろう。

中の倉の尾根がだいぶゆるやかな下りになり始める頃、ブナ林が現れる。やはり赤いテープを目印にしなが、自然に南へと向きを変えて下る。その後は雪に埋もれた杭の頭の並びが登山道だと思われ、それを目印に歩き始める。

気がつけば杭を見失い、また時折姿を見せる赤いテープをも見失う…。どっちだ…!? (あとから思えば、尾根沿いに下ればよかったのだが)、沢の方へと向かう足跡らしきものを見つけそちらに下ると…。明らかに沢へ向かう斜面。このまま下りてみることにする。この斜面で何回か雪の上や草むらの中を滑落しながら、結局は沢へ出てしまう。このとき、右足のももを強く打ち、気がつけば右足のアイゼンがなくなっていた。

14:30 沢へ出て、ひとまず休憩。その後、一度は尾根へ戻ろうと進んだが、斜面が厳しく、結局意を決して、沢の中をジャブジャブと歩くことに決める。ゴアの靴の中にも水が浸水していく…。この沢の途中に現れる、小さな滝のような所で一度全身水をかぶってしまい、はっと気がつく。ポケットの中に入れていた携帯電話が、もしかして壊れてしまった!? とりあえず急いで携帯をザック上部にしまい、沢を進むことをやめることにした。

沢から上がり、急な斜面でもできるだけ雪のないところを歩くことにし(やはり雪道は足場が危険…)、いざ尾根に戻ろうと歩き始めた。とにかく三点支持を心がけ、斜面を登るというよりは横に進むような感覚で歩く。初めのうちは沢の音がよく聞こえていたが、気がつけば沢からもだいぶ離れたところまで登ってきてしまい、どこだか分からなくなる。助けがほしい…。恐る恐る携帯の電源を入れてみると壊れてない!! (あの沢の中の水をどっぷりかぶったのに壊れていなかったのは、ゴアテックスのレインウェアのおかげか!?) そして、吉田隆と岡啓太郎に電話してみるが、つながらない。電波届かず…。

結局は進み続けるしかない。そう思って歩き始めると…!! なんと平らにならされた道に出た!! これは絶対に登山道だ!! これほどまでに登山道をありがたく思ったことは今までなかっただろう。登山道に出てしまえば楽チン。その後、三本槍、スキー場、北温泉の三方向を示す標識を見つけ、間違っていないことを確信する。

15:30 分岐を出発。さらに北温泉まであと1.2kmという標識も発見。ウキウキ。

15:50 小さな林道のような場所に出る。「北湯、湯本」の看板を見つけ、矢印の方向に下る。そして、事態は発生する。足跡を追いかけていくと何やらおかしい…。気がつけば左手に沢がある…。下りすぎたと思い、もと来た道を引き返す。赤いテープや白い布がかけられていた場所があるので、そこを中心にごろごろと歩き回るが分からない…。

17:00 北温泉に電話し、下り方のアドバイスを請う。しかし電話に出た方はあまり山を知らない人ようだ。とにかく沢には下りず、尾根沿いに下ってくるようにと言われる。そこで、沢の方まで下りすぎないことだけを意識して歩き続けるが、やっぱりわからない…。自分の足

跡をどんどん増やしていってしまうだけ…。

17:30 再度北温泉に電話。しかし、途中で電波が切れてしまう…。

18:00 もう一度北温泉に電話するが切れてしまう。携帯の電池もなくなりかけているので電源を切る。そして明らかに間違っていないと思われる場所、すなわち「北湯・湯本」の看板がある所まで戻ることにする。そして辺りが暗くなり始める…。

18:30 「北湯・湯本」の看板に到着。再度携帯の電源を入れ、北温泉に電話すると、すでに警察と山岳救助隊には連絡した旨を聞かされる。そこで電話にキャッチホンの音が鳴る。キャッチに出てみると、山岳救助隊の大高さん。今いる場所を伝え、とにかくそこを動かないようにと言われる。

その後、黒磯警察署からも電話が入り、「パトカーの赤いランプが見えるか」と聞かれるが、見えない…。とりあえず山岳救助隊が来るまでそこにいるようにと言われる。

19:00 いよいよ真っ暗。半月が闇夜を照らし出す。今日に限ってヘッドランプを置いてきた自分を呪うが、月明かりがとても有難い。月はこんなにも明るく夜を照らし出すのか。ふと見下ろせばランプが3つか4つ並んで動いているように見えた。救助隊の方が来てくれたのだろうか!?

警察から連絡が入る。

「パトカーがサイレンを鳴らすが聴こえるか!？」

聴こえた!!

「下の方から聞こえてきます」

「パトカーの赤いランプが見えるか!？」

見えた!!

「下の方に見えます」

「ランプのあるところが北温泉だ」

「ランプが3つか4つ動いているようにも見えます」

「そのランプと、パトカーの赤いランプはどちらが遠くに見えるか?」

「3つ4つのランプの先に、赤いパトカーのランプが見えます」

「なるほど。君のいるところはだいたいわかったから、あとはそこを動かないように。救助隊の人もすぐには行けないけれど、もうちょっとの辛抱だ。寒くはないか」

「大丈夫です」

そんな携帯電話のやりとり。とても微弱な電波だったのだろう。しかし、これほど文明に感謝したことはない。その後身元を聞かれて答え、自宅に連絡しておくとも言われる。(今日、親には何も言わずに山に来てしまったことを悔やむ…。)

そして、待つしかない。フリースを着込む。(ついでにチョコもつまんでおく。) 昼間沢に入ってしまったせいで、靴の中が冷たい。足の指を動かすだけで震えがくる。しかし凍傷にならないように足の指を動かし続けた。またいつでも動けるようにザックを背負って待つことにした。時々、ガサガサッ、という音が聞こえ、熊にでも襲われたらどうしよう、と正直心細かった。しかしふと見上げれば、張り詰めた空気の中、とてもきれいな星空だった。

ランプに向かって下りたい。でもまた迷ってしまったら…。しかし、とにかく体も動かしたかったし、「北湯・湯本」の看板から離れないようにしながら、行ったり来たりしていた。そして突然、聞こえた掛け声。「おーい!!」救助隊の人か!? 私も叫ぶ「ここで一す!!」ヘッドランプらしき明かりが動いているのが見えたのでそこまで下ると、救助隊の方2名と合流!!

- 21:00 救助隊と合流して下り始めたすぐの頃、救助隊の方から、足跡が間違った方向に伸びているが、正しいのはこちらだと指摘を受ける。そして、いざ下山、と思いきや、今度は救助隊の方々と一緒に迷ってしまった…。救助隊も残された足跡を追っていたが、それは私が昼間つけた足跡だったようで…。救助隊の一人がおかしいことに気づき、結局、登山道とは関係ない林の中を歩き回り、斜面を登ったり下りたりして、ようやく救助隊の人たちが登ってきたときにつけたと思われる足跡を見つけた。そして登山道らしきところに出る。その後、分岐を発見。「北湯まであと 0.6km」。間違いない!! (あとから思うに、「北湯・湯本」の看板からこの分岐までは、そんなに長く下りすぎではいけなかったのだ。時間にして5~10分程度の下りではなかろうか。)
- ここからはジグザグの階段道。雪もほとんど積もってない。急な階段道は嫌いだけど、今はこの登山道さえも愛しく思う。
- そして沢に出た。そこに橋が架かっている。この橋を渡ったところが北温泉。ここに街灯が4本立っていた。これがあの場所から見えた3つ4つのランプの正体だったのだ。
- 21:30 北温泉で黒磯警察署の方々と合流。たくさんの人から無事でよかった、との声をかけてもらう。ここには警察署の署長さんまで来ていただきたらしい。恐縮です。ひとまず、ここから駐車場まで歩く。北温泉のプールのような池を横目で見ながら…。(暗くてわからなかったが、これがあの噂の「泳ぎ場」なのだろうか!? こんな歩道から見えるところにあるものなのか疑問が残るが…)
- 駐車場ではパトカーが止まっていた。ここで事情聴取を受ける。身元の確認、今日の行動、私の登山歴等、ひととおりの受け答えが終わると、解散。このとき、私にチョコレートくれた人、ペットボトルのお茶をくれた人もいた。また、警察署のメンバーで唯一山に登っている人から、「これに懲りずに、また山に登ってください」とまで言われてしまった。この言葉に、何かが救われた…。
- その後、山岳救助隊の大高さんが経営している旅館に泊めていただくことにした。旅館ニューおおたかへ車で移動(大丸付近)。
- 22:05 ニューおおたかにてまずは汚れたものを片付けていると、おかみさんが部屋まで食事を持ってきてくれた。親子丼と味噌汁と漬物。うまいっ…。その後露天風呂へ。月明かりがきれい。昼間痛めた右ももをさすりながら、一人、露天風呂を満喫した(ちなみに翌朝もう一度入ったが、今度は茶臼岳の雄大な景色を拝むことができた)。
- 23:20 風呂から出ると、自宅から電話があったことを言われる。そこで急いで自宅にかけてみると、母からの非難の声。私から返せる言葉といえば、「明日、必ず帰ります…。」

記録: 石川暁崇

## 那須岳山行 2005.4.16 山行記録

とにかく、忘れ難い山行となった。

雪山。やはり単独山行は危険だし、まして雪山は経験がものをいう。私が今回選んだルートは、実はかなり上級者コースだったように思われる。(このコースは、夏でもあまり人が入らないということ、大高さんから教えてもらった。) 那須自体は冬山の入門的コースに選ばれていると聞いたことはあるが、それはあくまで茶臼岳付近のことなのだろう。コース自体をあまり調べずに来たことが、まずは大きな反省点である。そして単独山行は、その技量がすべてその人個人に返ってくることを忘れてはならない。

道迷い。結局今日だけで2度もしてしまったのだ。学生のときに道迷いをテーマに話し合ったとき、「沢には下りてはいけない」ということを学んだはずなのに、それを思い出したのは沢に下りてからだった。結局、今回、一度目の道迷いでは自力で登山道へ戻ることができたが、その間、何度も足を滑らせたのは事実であり、急な斜面を登ることに対しての注意力を、身をもって学べた。

二度目の道迷いは、雪の上に残された足跡に頼りすぎてしまったことが原因だろう。やはり地図を見なければいけないし、少しでも違うと思うのであれば、来た道を引き返すことが大切なのだろう。(また、大高さんより登山道にある赤いテープ等は、登山客が勝手につけているものなので信頼するな、と言われた。本来、国立公園である那須岳には、目印をつけられないそうである。)

携帯電話。これには感謝。もし携帯がなければ、今頃無事に下山できていたかわかったものではない。山奥にも届く電波。文明の力には感謝。そして、携帯電話を水しぶきから守り抜いたゴアテックス。これもまた文明の力だ。

地図。普段、当たり前のように登山道しか歩かないからこそ、地図の大切さはあらためて思い知らされた。私が持参していたのは50,000分の1(山と高原地図シリーズ)だが、25,000分の1の地形図の必要性も切に感じた。

またトレーニング気分で、大きなザックを膨らませたにもかかわらず、肝心なものを置いてきていた。ヘッドランプ、コンパス。またピッケルも持っていった方がよかったのだろう。

さらに今回は忘れ物が多かった。入山届、TP、サプリメント、切手、みんなの住所、洗面具…。これは事前の準備が出発の1時間半前だという、慌しさがいけなかったのだろう。そして普段の部屋の掃除が悪かったのも一因だろう…。そして、家族に何も言わずに出発したことも問題だった。

反省だらけだが、今回学んだことは数知れず。基本的には日帰りのトレーニング気分だったが、どんな山行でも油断は禁物だと悟った。それは、普段きちんとできていると自覚しているからこそ、慣れからくる油断だった。山は常に危険と隣り合わせであることを忘れてはいけない。そんな戒めを受けた山行となった。

山ではいろいろな出会いがあるが、今回はまさかの救助隊員と警察署との出会い。もちろん彼らには感謝しているし、また会いたいとも思うが…。また遭難したために再会、なんてことはならないようにしよう。

那須。また別の季節に、訪れたい。

05.4.23  
石川暁崇

\*-\*

#### 【お世話になった方】

★山岳救助隊員、Oさん(旅館ニューおおたかを経営)

★山岳救助隊員、Uさん

★黒磯警察署